

『わんぱく登山部』の実践と成果 ～「山登り」の地域福祉の可能性について～

わんぱく登山部プログラムディレクター

(広島登山研究所・保育士) 今村みずほ

こども達の生活から「自然」や「遊び」が遠のいて久しい。

こども環境学会が2004年に発表したデータ（「子どもの心身活性化増進に寄与する環境整備に関する研究」6月発表）によると、1955年にはこども一人当たり87,585㎡あった屋外遊びの空間は、2002年の時点で4,364㎡と約5%まで減った。そのうち「自然環境」に関しては40,546㎡/人あったものが906㎡/人（約2%）へと変化している。

広島の新球場・マツダスタジアムのグラウンド面積が12,710㎡であり、906㎡とはその約14分の1の面積だ。こども達は「30m歩けば自然から出て」しまう。なんとも狭い事である。

遊び時間も減った。1975年には平日一日約5時間あった遊び時間が2002年の段階では3時間にも満たなくなった。

このことは、こどもの心身にも大きく影響している。同学会は上記研究の中でこどもの「遊びに対する満足度」の経年変化も追っており、遊び時間に反比例して遊びの満足度が増えているという衝撃的なデータも発表している。一日5時間以上遊んでいたこども達は「もっと遊びたい!」と感じていた。それは次の遊びへの「意欲」になっている。仙田満氏（こども環境学会会長）は「こどもは遊ばなければ“本当の楽しさ”を知ることが出来なくなり、“遊ぶ意欲”が低下する」ということをこのデータから指摘した。

私達人間は言うまでもなく「自然物」である。その自然物の発達に自然環境が影響しているであろうことは想像に難くない。中でも、こどもにとって「遊び」は心身の成長に特に重要な役割を持っている。その彼らから「自然」と「遊び」を取ってしまったら一体どうなるだろうか。

そのような社会の課題にチャレンジすることを目的に、2007年4月、山岳連盟という地域の任意団体の中で「わんぱく登山部」は生まれた。山岳連盟の得意分野である「山登り」を通して、地域のこども達に自然と触れ合う機会、自然の中で遊ぶ機会を提供したい。それらの思いを出来るだけ形にしようと試みた。

この項では、わんぱく登山部の実践とその成果について追い、現代社会における「登山」の可能性、特に、「地域福祉」に関わる可能性について論じてみたい。



【わんぱく登山部概要】

名称：わんぱく登山部（小学生を対象とした山遊びクラブ）

目的：自然体験の少ない地域のこども達に、山登りをツールに自然と触れ合う機会を提供する

目標：①山登りを通して、こども達に「楽しい！」「好き！」といった気持ちの原体験を提供する

②こども達に、自然や自然の中での活動を好きになってもらう

③こどもの日常や、その家族の自然あそび再生のきっかけを提供する

④登山界の活性化を図る

対象：小学校3～6年生 保護者の参加不可 定員：32人（16人×2班）※通年メンバー固定

時間：7：30 ～ 17：30（市内集合解散）

期間：4月～翌年3月の1年間。※各班、定例会約9回。他、特別例会、保護者会など。

場所：広島県内の山を中心に。

標高1300m程度の広葉樹林帯の山で、標準コースタイム3～4時間程度のものを基本。

内容：日帰り遊び基本。ハイキング、沢登り、キャンプ、雪遊び、雪山ハイキングなど。

チャレンジものとしては、奥三段峡の沢登りから恐羅漢山への8時間縦走や、大山登山、

北アルプス遠征など。また、日韓の国際交流にも参加し、希望者による韓国遠征登山も行った。

運営形態：山岳連盟の有志と保護者による、クラブ活動（自主活動）

【工夫したところ】

目的・目標に向けて、以下の工夫をした。

クラブ活動として展開 ～自然を日常の延長線上で捉える。～

多くの自然体験活動は宿泊型やイベント型が多い。そこには主催者が意図せずとも「自然は非日常的なもの」というメッセージを含んでしまう可能性がある。私達のメッセージは「人は自然物」。そこで、運営形態を「年間のクラブ活動」とし、また、こどもの遊びの形と同じ「日帰り」を基本とした。

地域の山好きな大人がこどもを連れ出す ～自然な伝承の形を追う～

「好き」「楽しい」という感情を概念化し、それらが育っていく過程には傍らに「共感者」がいることが効果的である。特にその行為が「好き！楽しい！」と強く感じている大人は、自然な形でこども達の良き共感者となりうる。幸い山岳連盟は「山登りが好きな大人」が集まって構成される団体だ。この人材を「先生」とせず、「地域の山好きな大人」としてこども達の傍らにいてもらうようにした。近所のお兄さんやお姉さんに遊びを教わり、おじさんやおばさんに見守られるという形を追った。

場を提供する ～こどもの生活に本来あった自由な遊びの時間を指す～

イニシアティブゲームや工作などという「用意されたプログラム」展開を一切放棄した。こどもと一緒に山に行って登って遊ぶ。ただそれだけだ。山で疲れない歩き方やルールなど講義や説明も一切

無し。こども達の「興味の赴くままの寄り道」を大事にした。また保護者はあえて不参加とした。

年に一回の親子で山あそび ～日常生活に自然遊びを復活させていくために～

継続して日常的に展開することもこの目標のための工夫であるが、家族単位で自然あそびに興味をもってもらうことこそ、長期的な視点でこどもの日常に自然遊びを復活させることにつながると考えた。年に1回、親子での山登りを例会活動として取り入れた。

【成果：好きと楽しいは提供できたか】

「楽しい」と「好き」を数字で見える

表1は「2010年度までの登山部に入会したこども達とその継続の様子」を表したものである。4年間でわんぱく登山部は91人の広島のこどもを山に連れ出すことに成功した。うち、2010年度1月末の時点で55人のこども達が「次年度に継続」して山登りを続けている。2010年度までのこども達(91人)を対象にすると、継続率は約60%となる。(2011年度新規は含まず)

「継続をする」ということを「楽しい」「好き」という気持ちの表れとして定義したとすると、55人のこども達に「楽しい」と「好き」を提供できたということになる。3年以上継続したこどもは28人、うち4年以上が13人となっている。

但し、継続には経費を出す保護者の理解が絶対必要であり、こどもの意志のみで決められていることではないのは明白である。とすると、継続者というのは、『子どもも山遊びが気に入っており、保護者も山遊びに価値を見い出している人(＋続けられる環境がある)』という組み合わせとなる。1年のみの子ども達もちろん現場で山遊びを大いに楽しんでいる。書き添えておきたい。

「楽しい」と「好き」をこどもの行動で見える

<中学生登山部の発足>

2010年から「中学部」が出来た。小学生の登山部というだけでも恐らく全国初であろうが、学校外での中学生の登山部というのも果たして全国初なのではないだろうか。実はこの中学生登山部、

こども達の気持ちから出来たクラブである。6年生で自動的に退会となるこども達が、毎年「中学生になってもやりたい」と言っていた。2010年度に6人の部員を得て出来た。

中学生は忙しい。「全校生徒クラブ活動必須」の学校は少なくないし、進学校は土日も学校行事が目白押しだ。それでも、彼らはなんとかやりくりして年数回の中学生登山部にやってくる。補習になって活動日がつぶれないように、期末試験を頑張ったりする。

このような子ども達の行動は、山登りが「好き」で「楽しい」と感じている、と定義できそうだ。



表1 2010年までに登山部に入会した子ども達と継続の様子													
No	名前	2007	2008	2009	2010	2011	No	名前	2007	2008	2009	2010	2011
1	恭子	1	1	1	1	中学生	43	祥之介				1	1
2	勘太	1	1	1	1	中学生	44	琉唯				1	1
3	綾音	1	1	1	1	賛助	45	レイ				1	1
4	浩聖	1	1	1	1	中学生	46	悟志				1	1
5	晴喜	1	1	1	中学生	中学生	47	広之				1	1
6	慧悟	1	1	1	中学生	中学生	48	友希				1	1
7	聡	1	1	1	中学生	中学生	49	肇				1	1
8	壮一朗	1	1	1	中学生	中学生	50	康平				1	1
9	陽和	単発	1	1	1	中学生	51	朱鞠				1	1
10	航希	単発	1	1	1	中学生	52	蒼輝				1	1
11	澄香	1	1	1	賛助		53	勇太				1	1
12	一輝	1	1		中学生	中学生	54	泰貴				1	1
13	聖明		1	1	中学生	中学生	55	泰晴				1	1
14	恭嵩	1	1	1			56	智香	1				
15	健一朗	1	1	1			57	秀征	1				
16	真由	1	1	1			58	芽衣	1				
17	悠花子	1	1	1			59	晴名	1				
18	涼介		1	1	1		60	彩香	1				
19	雄基			1	1	中学生	61	舞子	1				
20	昴辰			1	1	1	62	真也	1				
21	瑞季			1	1	1	63	大輔	1				
22	貴子			1	1	1	64	彰二	1				
23	康太			1	1	1	65	成美	1				
24	晶			1	1	1	66	真央	1				
25	航			1	1	1	67	穂華	1				
26	史弥			1	1	1	68	祐衣香	1				
27	弾斗			1	1	1	69	紘生	1				
28	司			1	1	1	70	諒平	1				
29	衣	1	1				71	佳歩	1				
30	智世	1	1				72	誠力	1				
31	菜奈恵	1	1				73	将史	1				
32	千尋	1	1				74	航太	単発				
33	崇充	1	1				75	康德	単発				
34	伶奈	1	1				76	史帆	単発				
35	花菜	1	1				77	順平	単発				
36	光一朗	1	1				78	貴寛	単発				
37	昌治	1	1				79	大和	単発				
38	大貴	単発		1			80	海斗	単発				
39	紘暉	単発	1				81	克希		1			
40	夏実	単発	1				82	二千翔		1			
41	瞳		1	1			83	一将			1		
42	史将		1	1			84	森			1		
							85	京助			1		
							86	祐乃			1		
							87	涼香			1		
							88	莉菜			1		
							89	啓之			1		
							90	明弥				1	
							91	岳				1	
単 発：2007年のみ実施。クラブにもれた50人を対象							部員数→ 53 33 37 32						
中学生：2010年から中学部が発足している。							※2007年は単発12人含む						
2011年度の欄は継続の様子を表す。													

<もっと大きな山に登ってみたい>

2008年8月、希望者を募った「北アルプス遠征隊」を実施した。目指す山は立山・剣岳である。この初めての遠征は大成功で、子ども達の心も大きく揺らし、2010年まで毎年続けられている。山が山だけに準備も大変で連れて行ける人数も限られてしまうが、子ども達の心の成長が顕著に見られる「山あそび」だ。

2008年に遠征を初めて企画した当初は、実現は半々ぐらいだろうという気持ちだった。山が大きく危ないので、こどもが怖気づいて来ないのでは、いやそれより親御さんが許さないのではないだろうかと思った。募集メールを流した途端、「行きます！」と5人やってきて驚いた。2009年には遠征隊隊員は8人になり、2010年は9人となっている。

「もっと大きな山に登ってみたい！」「チャレンジしてみたい！」そういう気持ちは、山が「好き」で「楽しい」からこそだろう。そして一度行ったこどもは、次の年もこの遠征を目指してくる。

こども達の日常に、山遊びは復活したか

エピソードがある。わんぱく登山部で「山登りの楽しさ」を知ったある男子が、普段の遊びの中に「山登り」を取り入れ始めた、というのだ。「楽しいから行こう！」と学校の友だちを数人誘い、家の近くの裏山へ自転車で集合し、毎日登って遊ぶのだと言う。

そして、こども達は家族をも「楽しい山」に誘った。当初は、こどもには山登りをさせるが大人の私達は結構です、という親御さんは多かった。だが、活動から帰ってくる度に「山が楽しい！」というこども達のいきいきした表情や話しに、「山って面白いのかな？」と心を動かされて行ったという。家族のレジャーに再び山登りを取り入れる例が増えている。

家族をつなぐツール・弟妹の憧れ・兄姉のアイデンティティ

こどもが山遊びをすることで、家族間のつながりに一役買った。中高年登山ブームと言われる中、各家庭でも祖父母が登山を趣味にしているというケースは少なくなかった。登山について疎い親世代が祖父母に知恵を借りるという場面、孫が共通の趣味をもってくれたことを喜ぶ祖父母、祖父母の例会山行についていく孫達、という姿が見受けられるようになった。

また小学校3年生未満の妹・弟たちは、姉や兄達をみて「山って面白いんだ。私も行きたい！」と憧れた。兄や姉達は誇りを持った。それまで弟妹に習いごとやテストで負けて所在無かった兄姉が、登山で自身のアイデンティティを構築し自信をもって振舞えるようになった例も数例見られた。

登山界は活性化したか

2009年2月、日本山岳協会が初めての「ジュニア普及交歓会」を東京オリンピックセンターで開催した。開催のきっかけはわんぱく登山部である。筆者が講師として呼ばれ、各県の理事長が集まった会場で、わんぱく登山部の実践とその成果を発表した。

この後すぐ、長野県山岳協会は6月にわんぱく登山部への視察を実施している。同協会はこどもへの登山そのものの普及を目的とした「ジュニア登山教室」を同年10月に実施。2010年は年行事として2回を企画し実施。将来的に年4回を目指しているそうだ。

また 2010 年、福井県山岳連盟が自然体験活動支援事業「トムソーヤースクール企画コンテスト」(安藤スポーツ・食文化財団主催 ※日清食品)に、こどもに向けた山登りや沢登りの企画を出品し、実施支援団体として選ばれている。

現在、山岳連盟はどこも「高齢化」という問題を抱えている。この課題に取り組むには「山登りを愛する若者」を増やしていくほか方法はない。だが、「次世代育成」の課題を抱えながらも、長い間多くの人が「よそ様の子どもを山に連れて行く」ことに躊躇していたのであった。そのことは、こども対象とした普及事業の多くが、施設で行う「クライミング教室」中心であったことから伺える。

もともと「こどもを山へ」という思いをもつ団体は多かったろう。その彼らの背中を押し、こどもが山や沢に行ける行事の実施や、実行する団体が増えた。これはひとつの成果と言って良い。

2007 年初年度に、わんぱく登山部の企画は先に紹介した「トムソーヤースクール企画コンテスト」で大賞を受賞した。表彰式でお会いした審査員の方々の開口一番は「よく（あんな危ないことを）やりましたね！」だった。登山界だけではない。多くの自然体験活動団体が自然を謳いながらも「そのままの自然にこどもをそのまま連れ出すこと」を出来ないでいるのだ。登山はまさに“そのままの自然”に“そのまま”が実現出来る、うってうけの自然遊びだ。

以降、そのコンテストの出品企画には「山登り」が急に増えている。

他に何が提供できたか

<日本はきっと良い国だと思ってもらえるような人になりたい>

2010 年 5 月、念願の韓国訪問が実現した。「韓国の山に登りたい」というこども達の気持ちから出来た企画だ。この訪問は大成功で本当に素晴らしかった。韓国のもてなしは本当に情に深い。初めての訪問にも関わらず、ホームステイまで実現した。大邱市の最高峰、八公山にも登った。

韓国との交流を毎年少しずつ積み重ねていったことは、子ども達の「異文化」への肯定的な興味をもらたしていたと思う。日韓交流でこども達の心は大きく成長した。

「サンギさん（登山部を手伝ってくれている韓国人留学生）が良い人なので韓国の人はきっと良い人だと思っていた。行ってみたらやっぱり大人も子どもも皆良い人だった。自分も日本はいい国だね、と言ってもらえる人になりたい。」

こども達は山登りを通して様々な新しい世界と出会い、自分自身を発見し、自分のゆく道を決めて行っている。そんなことも、わんぱく登山部の可能性であり、成果であると言える。



<僕は本物の自然がいい>

大きくて危険な北アルプスへ。行ってみたいけど、でも怖い。そんな葛藤を超えて 2009 年、上高地・穂高遠征への応募を決めた子どもがいた。その子の感想文が良い。

『今回の北アルプスちょうせんはとてもなやんでいました。とても高い山だと母さんに聞いていたからです。でも ぼくはちょうせんしたい気持ちでいっぱいでした。今までたくさんの山に登ったけど、まだまだ自分には力があると思っていたからです。』



決めるまでの葛藤と、決意した自分の強い気持ちが書かれた冒頭から、北アルプスの様子、様々な出会いと出来事、仲間との楽しい時間、そして自分の心がまっすぐな言葉で綴られてゆく。

そして、『ぼくは、本を読むのはきらいだけど、いろいろな景色の写真を見るのは好きです。でも写真の景色を見るより、本物の景色を見るほうがもっといいです。山のにおいや風は本にはないからです。』という、文章が現れる。

大人も子どももゲームやテレビなど「幻想」の世界にこもりがちな今の世の中で、こども達に「本物」に触れる経験を提供したい、と願ってわんぱく登山部を続けてきた。その彼らが「本物が好きだよ」と言ってくれる。こんな瞬間に立ち会えるということは、大人として究極の喜びに近い。

<「山が好き」を友だちと分かち合える場>

「趣味は山登りです！」と胸をはっているこどもが広島県内に確実に数名いる。なんだか面白い。「こどもの趣味」の一つとして山登りを提案できたことは大きな成果と言える。そして同時に私達は「共通の趣味をもつこどものコミュニティ」を提供しているという事実在最近気がついた。「山登りっていいよねー」とお互い言い合える場が、今までこども達の周辺あったのだろうか。なんともユニークで、かつ必要性の高い場であろうか。

「あそこに行けば登山好きなこども達がいる」というコミュニティが地域にできることは、次世代育成の何よりの基盤ではないだろうか。わんぱく登山部の意義はそこにこそあるのではないだろうか。私達は「山登りが好き」になる次のこども達のために、在り続ける必要がある。

総合評価 ～子どもを山に連れ出そう～

広島登山研究所 所長（わんぱく登山部 団長） 松島宏

自分達が取り組んでいる登山は競技スポーツでない。勝負や記録が付き物の競技スポーツでさえ上

手にやれば教育的に絶大な力となる。登山は何歳までも楽しめる生涯スポーツであり尚且つフィールドが自然である。人間形成の場としての価値は高い。自分も山好きの父親の影響で登山にこだわって人生を過ごしてきた。

山岳連盟の一員として小中学生の登山をサポートしたいという発想はあったがなかなか踏み出せなかった。高校教師として高校生の登山部に長年かかわってきたが大会や競技が中心で山岳連盟に人材をつなげることが出来なかった。そこでとことん楽しい小学生の登山部を志した。学校の遠足や林間学校の登山が子どもを山嫌いにしたり、山好きの大人が自分の子どもを山へ連れまわして山嫌いにする話をよく聞く。何事も強制は人を楽しくさせないことの証明である。

「自然の中で楽しく遊ぶ」「好きと楽しいを大切にする」「指導や講義はしない」「山は危険なので安全管理はきちんと行う」「自由が基本」などのシンプルなコンセプトにして肩の力を抜いた楽しい登山部を目指した。極言すれば「子どもを山に連れ出して、楽しく遊ぶ。」であるが、これは効果観面で山や自然や仲間が最大の教師や学校となることを実感した。「子どもを山に連れ出せば勝ち！」みたいな感覚である。現代の子どもにとって自然の中で自由に楽しく遊ぶことがいかに大切で子どもを成長させるかを実感した。保護者も自分の子どもの変化に驚いた。特別な子ども用のメニューや仕掛けは一切なし、自分達が実践している山遊びをそのまま提供した。例えば広島は暑いので沢登りをさせた。自分達と同じように滝を登らせ、淵を泳いだ。子どもは当然のように熱中した。高い山に登ってみたいという欲求が大人と同じように出た。県内の里山から大山や北アルプス・南アルプスに遠征した。彼らの中には私達と同じようにアルピニストの感性が誕生した。天候悪化で登頂を逃すと、本気で悔しがった。子どもだましは一切無しだし、自然は子どもといえども容赦はしてくれない。大山の九合目で飛ばされそうな突風で身の危険を感じて引き返したり、雪山で低体温症になりかけたりと様々なリスクは当然のように子どもに降りかかるが、山で楽しく遊びたい気持ちが勝りどんどん成長する。月に一度の登山であるが子どもにとって親抜きで一日自由に遊べる環境はなかなか魅力的だ。継続する子どもが多い。

山好きな第三者の大人が子どもを野山に連れ出してやることは結構価値のある仕事だと実感した。科学的根拠はないが山屋として自覚している真理にも似た感覚、「生物としての人間は、自然の中で育つ」「自発的な活動としての遊びは人を育てる」を証明しているような活動である。小学生といえども「登頂したい」とか「より困難を目指す」とかといった冒険や挑戦の心が自然発生的に生まれてくる。



中学生・高校生・大学生・社会人となるまで一緒に遊ぶことが出来れば登山界の活性化に繋がるはずである。登山界も高齢化の呪縛から解放される一筋の光明が子どもの登山の支援かもしれない。自分達が実践してきた「山でリスクを背負って遊ぶこと」は結構自分自身を成長させている。子どもを山に連れ出そう。それ位のリスクは平気で背負ってもいいのではないかな。人様の子どもでも山に連れ出すべきなのである。



<付録>

『北アルプスちょうせん』 広島市立戸坂小学校5年 井上航希

今回の北アルプスちょうせんは、とてもなやんでいました。とても高い山だと母さんに聞いていたからです。でもぼくは、ちょうせんしたい気持ちでいっぱいでした。今までたくさんの山に登ったけど、まだまだ自分には力があると思っていたからです。

北アルプスの天気はあまりよくありませんでした。雨がふったり、くもったり、晴れたり、雷が鳴ったり色々でした。でもいろいろな天気の花が見れてぼくは幸せでした。

山登りはやっぱりとてもきつかったです。歩いても歩いても足がいたくなって頂上にはつきませんでした。頂上には絶対行きたかったのがんばりました。しかも、岩ばかりでびっくりしました。ロッククライミングもしました。

前穂高岳から見る景色は高い山がたくさん見えてとてもきれいでした。とてもつらかったけど、がんばったから良かったと思いました。登ったかいがあつてよかったと思いました。こういうけいけんはなかなかできないなあ、と思いました。

奥穂高岳には行けなかったけどよかったです。行ったらたぶん死んでると思います。

焼岳にも上がりました。もくもくとけむりが出てによう（いおう）のにおいがしました。へんな山だなと思いました。でも景色はとてもきれいです。山から見る景色はどこにいても最高です。

へびをつかまえたり、カモの赤ちゃんをつかまえたりする人がいておもしろかったです。山の友達とも楽しくすごせてラッキーでした。

僕は、本を読むのはきらいだけど、いろいろな景色の写真を見るのは好きです。でも写真の景色を見るより、本物の景色を見るほうがもっといいです。山のにおいや風は本にはないからです。北アルプスなやんだけど行って良かったです。がんばれば苦しくてもできるんだなあと思いました。今度は奥穂高岳にいきたいです。